

流域ガバナンス／琵琶湖に学ぶ 八郎湖の未来

谷口吉光（秋田県立大学）

滋賀県にある日本最大の湖・琵琶湖。この琵琶湖が水質悪化に苦しむわが八郎湖を救うお手本になる、と聞いたらみんな驚くのではないだろうか。

実は水質悪化で困っているのは八郎湖だけではない。全国の多くの湖沼が水質問題や環境問題を抱えている。琵琶湖はもちろん、霞ヶ浦（茨城県）、中海（島根県・鳥取県）、宍道湖（島根県）、諏訪湖（長野県）など有名な湖も含まれている。

湖沼で水質問題が起こりやすいのは、もともと水域が閉鎖的なため富栄養化のような水質悪化が起こりやすく、一度起こると元の状態になかなか戻らないからである。有効な解決方法が見つからず、対策が長期戦になるのは八郎湖も同じである。

水質が悪化した湖沼を指定して特別な対策を取る「湖沼法」という法律があり、八郎湖は2007年に指定を受けたが、実は琵琶湖はすでに1985年にこの法律の指定を受けている。八郎湖より22年も早い。

有効な解決法が見つからないとは言っても、長い間取り組んでいれば自然に経験と知恵が蓄積される。この意味で琵琶湖は八郎湖の「22年先輩」であり、八郎湖に関わる人々は琵琶湖からたくさんのことを学べるはずだ。

私は縁あって琵琶湖の水質や農業環境問題を勉強する機会があったので、「いつか琵琶湖の経験を八郎湖の人たちに伝えたい」と思ってきたが、先日その願いが実現した。

本欄でも何度か紹介した「八郎潟・八郎湖学研究会」が設立から1年の活動を終え、去る3月10日に2回目の総会と記念講演会を行った。この記念講演の講師に琵琶湖研究者の奥田昇さん（総合地球環境学研究所准教授）をお招きしたのだ。

期待通り、奥田さんのお話は聴衆に多くの驚きと感動を与えたようだ。いくつか紹介しよう。

○琵琶湖の水質を考える時、琵琶湖だけを見ていてはダメだ。流域全体を見なければいけない。「流域」というのは琵琶湖に流れ込む河川の上流に広がる森までを含む地域全体のことをいう。琵琶湖の水は流域に降った雨が河川を流れて琵琶湖に流れ込むのだから、琵琶湖対策は流域全体を対象にしている。

○対策は行政がトップダウンで進めるのではなく、流域の住民の意見や要望を積極的にくみ上げ、「住民参加」で進めなければ効果は上がらない。

○流域住民が自主的に地域と環境を「自治」できるようになることが重要だ。それを「流域ガバナンス」という。

○水質対策を進める時には、流域に住む人々の地域問題（高齢化や過疎化など）の解決につながるような対策を提案する必要がある。そうしないと住民は本気で参加してくれない等々。

詳しく説明できないのが残念だが、「流域」「住民参加」「ガバナンス」「地域問題との一体的解決」などの考え方はこれからの八郎湖対策にもぜひ取り入れる必要があると思う。私たちが琵琶湖から学ぶべきことは多い。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2019年3月24日掲載分を加筆・修正した）